



栗田口霑笛竹

(澤紫ゆかりの咲分)

近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十八年八月十日発行

定本 圓朝全集

全十四卷
（卷の三）

限定版 五五〇部 定価千弍百円 千三〇

校訂編纂者
圓朝會代表者

鈴木行三

発行者 松本富夫

版	定	限	第

発行所

株式
会社

世界文庫

東京都目黒区原町一、三五五番地

電話 東京七二三局九二四四（代表）
振替 東京七八四九八番

序

今を去る三十年の昔、三題噺といふ事一時の流行物となりしかば、當時圓朝子が或る宴席に於て、國綱の刀、一節切、船人といふ三題を、例の當意即妙にて一座の喝采を博したるが本話の元素たり。其時聽衆咸言つて謂へらく、斯ばかりの佳作を一節切の噺し捨て爲さんは惜むべき事ならずや、宜敷く足らざるを補ひなば、適れ席上の呼び物となるべしとの勧めに基き、尙金森に充分の枝葉を茂らせ、國綱に一層の研を掛け、一節切に露取をさへ添へ、是に加ふるに俳優澤村曙山が逸事を以てし、題して花菖蒲澤の紫と號せしに、この紫や朱より先に世の評判を奪ひ、三十年後の今日迄依然として其色を變ぜざるのみか、一度やまと新聞に寫し植字たるに、這も復時期に粟田口鋭き作意と笛竹の響き渡り、恰も船人の山に登るべき高評なりしを、書房は透さずこの船人の脇轡を押す事を許されたりと

て、自己おのれをして水先見みづさきみよと乞こうて止やまねば、久ひさしく採さらぬ水菰みづぐさの禿かぶたる掉さかを徐やをら採さり、ソ
ラ當あたりますとの一言いちげんを新版發兌しんぱんはつたいの船唄ふなうたに換かへて序じよとす。

弄月庵主人記

圓朝全集 卷の三 目次

口 繪

圓朝贊 圓橘筆お多福の圖
 九代目市川團十郎の稻垣小三郎
 「花菖蒲澤の紫」(粟田口の舊本)の口繪

粟田口霑笛竹……………序 弄月庵主人
 (澤紫ゆかりの咲分) 挿畫 孟齋芳虎
 同 大蘇芳年……………一

霧陰伊香保湯煙……………(挿畫) 大蘇芳年……………三五

梅若七兵衛……………(挿畫) 水野年方……………六五

栗田口霑笛竹

一

さて今日から寛保年間にございました金森家の仇討のお話で、ちとお話にしては堅く
しうございますから、近い頃ありましたお話の人情をとりあはせ、世話と時代を一つにし
て永らくお聞きに入れましたお馴染のお話でございますが、ちと昔の模様でございます、
草双紙じみた處もございます。栗田口國綱と云ふ名劔が此の金森家にございます。これは
その北條時政の守刀で鬼丸と申します名刀がございました、これと同作でございます。
かの國綱の刀の紛失から末が敵討になります。このお話の發端は、寛保三年正月の五
日でございます。昔も今も變りませんのは、御婦人は春羽根をつき毬をついてお遊びなさ
います。男の兒は紙鳶といつて風を揚げるといふのが春の遊びで、どこともなく陽氣なも
のでございます。一體空を見るのは藥だといふので、皆仰向くやうな遊びでございますか
ら、紙鳶をびい〜と揚げますれば、是非子供は空を見なければなりません。また羽

根を突けば必ず空を見る。只今あの皆様が椅子にかゝつてコップで御酒を飲む時は、仰向
 いてグーッと飲まなければならんやうな事になつて居りまする、つまり人間の健康のため
 に致すことで、アノ羽根を突くのをよく聞いて見ますれば、あれは蚊に喰はれないま
 じなひだと申しました方がございますから、どういふ譯かと質ねましたらば、子守が兒を
 負ひまして、カチーリ〜と羽根を突くと云ふと、むくれんじの玉の返る處が蜻蛉といふ
 蟲に似て居りますから、蜻蛉返りと云つて、くる〜ツと返る、蜻蛉と云ふものは蚊を捕
 り喰ふ虫だと云ふので、赤ん坊の頭を蚊に喰はさんがためにカチーリと羽根を突き、くる
 くるツと返ると蚊が逃げるんださうですから、一體は夏つかなければならんものだが、何
 ういふ譯か正月羽根を突くことになりましたが、昔の羽子板は誠に安つばいものでござい
 ます、只今でも何うかすると深川八幡の市で賣つて居りますのは、殿さま、かみさま、さ
 んじやさまとか云ふ昔風の繪が書いて有りますが、只今は役者の押繪で誠に美しい大さ
 いのが流行ります。近年は羽子板の外へ刀を持つた手などの出たのが有りまして、羽子板の
 大さが六尺三寸と云ふので、まさか、朝飯前には中々持ち切れません、それでカチーリ〜
 と突きますが、能く突けたもので、親の教より役者の押繪の方が大事だと見えて、女「いえ、

これは貸しません、私のは大切な新駒屋のだから中々貸されません、似顔へ吉野紙を當ててしまつて置くのですから。男「そんな事を云はないで貸しておくれよ、追羽根をするんだから。女「顔を汚すといけないからさ。男「ぢやア宜い、塵取でも持つて来よう。と正月は必ず追羽根を突きます。丁度其頃湯島切通しに鉄鍛冶金重と云ふ名人がございました。只今は刈込になりましたが、まだ鬚の有る時分には髪結床で使ふ大きな鉄でございます。鍛へが宜しいから、デヨキリと一鉄で剪れるが、下手な人のこしらへた鉄で剪ると、バラ／＼に先が散ばつて幾度こいても揃ひませんから、また剪ると額の處へ細かい毛がはら／＼落ちて、餘りぞつと致しません。金重の鍛つた鉄はデヨキリと一鉄で眞直に剪れるので大層に行はれました。金重は六十五になります、無慾な爺さんでございます。只た一人年寄子でお富と云ふ娘がございましたが極別嬪でござい、年は十八に相成りますが、誠に世間でも評判の好い娘で、少し赤ら顔の質だが、二重瞼で鼻筋の通つた、口元の可愛らしい、笑ふと靨と申してちよいと頬に穴があきますが、どういふ器械であくか分りませんけれども、その穴は餘程深く、二分五厘有つたと云ひます、誰が尺を突込んで見たか、髪の毛の艶が好く、中肉中丈で、お臀の小さい、踵の締つた、横骨の引込んだ上ものでございま

す。一人娘ゆゑ秘藏に致し氣儘に遊ばして置きましたが、日暮方から羽根を突きに往つて
 歸りません。此の家に恭太郎といふ弟子がございましたが、親方にも當人にも年の分らな
 い、色氣もなく喰ひ氣一方の腑抜な男でございます。金重は大人ゆゑ愚なものほど愛して
 居りました。金「恭太や」。恭「えい。金」お富は何處へ往たのう。恭「表のての字の前で羽根
 を突いてたよ。金」往つて呼んで來な。日が暮れるからさつさと御飯を食べてお寐なさいと
 云つて呼んで來な。恭「あいよ。と云ひながら外へ出て參りました。その横町を眞直に出る
 と、ての字と云ふ居酒屋の前が廣く成つて居ります處で、カチーリ〜とお富は友達と
 羽根を突いて居ります傍へ恭太郎が來て、恭「あい、お富さん、お富さん。富」何んだよう。
 恭「あの親方がもう止せつてえから、羽根を突くのは明日におしよ、日が暮れると暗く成る
 よ、お飯を喰べないと腹が空るとさ、早く寐ないと眠く成るとさ。富」何を同じやうな事を
 いふのだよ、あいよ今直ぐに歸るから少し待つておいで……きいさん上げますよ、宜うご
 ざいますか、さア上げますよ。カチーリとはづれで駈けて突く機みに通り掛りの人の腮を
 ポンと突きましたが、痛いもので、年始廻りの供の歸りが、首に大きな風呂敷を掛け、千
 草の股引白足袋に雪踏を穿いた小僧が腮を押へ泣聲を出して、小「あの娘でございます、突

然に來て私の腮を拂つたので、あいたく。若し宜いや仕方がない、腹ア立つもんぢやアないよ。小「腹ア立つて立ないって、人の腮を拂つて置きながら謝りもしないで、彼處のお飾松の處へ隠れて、さうしてお前さん私を見て居やアがる、あんな奴は有りません、いや此處へ來て謝まれ。若しそんな事を云ふもんぢやアない、笑ひ顔をしろ。小「痛くつて笑ひ顔は出來ません、小言を云つて下さいよ。若し彼方も面目なくつて間が悪いから、慌てゝお飾松の蔭へ隠れたのだが、若しお前の方が極て彼方が腮ならばお前が謝らなければならぬまい。小「詰らない事を仰しやる、あたりまいでございませう、小言を云つておくんなさいよ、私の腮を拂はれたから。若し拂はれたら目出度いではないか、宅の安兵衛が去年の暮に拂はれないとつて心配をしてゐたが、まだ松もとれないのに拂はれたら結構ぢやアないか。小「ウーン、掛廻りぢやアありませんし、若し旦那はんはあんなことばかり云つてゐる、齋頭小言を云つておくれよ。齋「お、娘さん冗談ぢやアねえせ、羽根を突くならもつと端ばたへ寄つて突きねえ、人に怪我をさせて何うするんだ、冗談ぢやアねえせ、廣く處で羽根が突きたけりやア地面を買つて突くが宜いや。小「齋頭これ御覽、腮から鼻から耳へかけて拂はれたんだ。齋「それぢやア、正月の耳鼻腮痛だ。小「齋頭まであんなことをいふのだものを、若しそん



な事を云ふもんぢやアない、何でも春は心を柔しく持つて賑やかにしてなければいけない。
と宥めて居ります。息子の年頃は二十三四で、色のくつきりと白く、鼻筋の通つた、口
元の締つた眉毛の濃い、薄く青髭が生へて居りまして、つや／＼しい大結髪で、けんばう
行義あられの上下に、黒斜子の紋附を着、結構な金蒔繪の印籠を下げ、茶柄に蠟鞘の小脇
差を差して居りますから、年始歸りと見えます。若さア／＼往かう、これから腹を立つも
のぢやアないよ。と小僧を宥めてゐる、物の云ひやう男振りと云ひ、眞に情の有りさうな
お方と世間知らずの生な娘もぞつと身に染む戀風に、何處の人だか知れませんが好い息子
さんだと思ひ初め、ぼんやりとして後姿を見送つて居りました。これが因果の始りでござい
ます。無闇に男振や顔形を見て人に惚れべきものでは有りません。姿形ぢやア心意氣が分
りません。心意氣を見ないで惚れてはならんと圓朝が咎める譯は有りませんから惚れても
宜しいが、實は何處町何丁目何番地何の誰と云ふことを區役所へ住つて戸籍をあらつて、
其人の身分を調べた上に、智慧が有るとか財産が有るとか、官員に成つても勅任にでもな
れる人には惚れても宜いが、只顔の綺麗なのを見て浮氣な岡惚をするのは、今開化の世の
中には智慧のない話でございしますが、そこがそれ戀は思案の外で、お富は彼の息子は何處

の方^{かた}とも知らず、只何時^{ただいつ}までも立止^{たちど}まつて見て居^をりました。恭^こ「あい、お富^{とみ}さん、だから親^{おや}方^{かた}が早くお歸^{かへ}りと云^いつたんだよ、お侍^{さむらい}さんの腮^{おこ}などを拂^はつて。富^ふ「お侍^{さむらい}さんぢやアないよ。恭^こでも上下^{かみしも}を着^きて、はさみ箱^{はこ}を擔^{かつ}いで、お槍^{やり}を立て、居^をたせ。富^ふ「なアにあれば、年始^{ねんしげ}歸^{かへ}りのお人^{ひと}だよ。恭^こ「早く家^{うち}へお歸^{かへ}りよ。富^ふ「今歸^{いまかへ}るよ、さいさん、みいちやん、左様^{さやう}なら、また明日^{あした}。と云^いひ捨て、宅^{うち}へ歸^{かへ}つて臥^ふりましたが、何^なう云^いふ因果^{いんぐわ}か寢^ねても覺^さめても現^{うつ}にも、彼の^か息子^{むすこ}の顔^{かほ}が眼^め先^{さき}を離^{はな}れませんでした、漸^{だん}々^ぐ鬱^{ふさ}ぐやうな事^{こと}に成^なりましたゆゑ、親^{おや}父^{ちち}も心配^{しんぱい}いたしましたが、金重^{かねしげ}はもうこれ六十五でございます、不圖^{ふと}風^{かぜ}を引^ひいたのが原因^{もと}で漸^{だん}々^ぐ病^{やまひ}が重^{おも}くなり、僅^{わずか}か二十日^{ふつか}ばかり煩^{わづら}つて死去^{みまか}りましたが、江戸表^{えごおもて}には別^{べつ}に身寄^{みよ}り親類^{しんるい}も有^ありませんが、下總^{しもふさ}の矢切^{やきり}村^{むら}から金重^{かねしげ}の妹^{いも}がで^でて参^{まゐ}りました。お富^{とみ}のためには眞實^{しんじつ}の叔母^{おは}ゆゑ、後懇^{うとねんごう}に野邊^{のべ}の送り^{おく}りも濟^すませてから、丁度^{ちやうど}七日^{なぬか}の逮夜^{たいや}の日に、本郷^{ほんごう}春木町^{はるきまち}の廻^{まは}りの髪結^{かみゆひ}で長次^{ちやうじ}さんと云^いふ、色^{いろ}の淺黒^{あさぐろ}い、三十二三になる小粹^{こいき}な男^{をとこ}が遣^やつて参^{まゐ}りました。

二

長^{ちやう}「え御免^{ごめん}ねえ、眞平^{まへい}御免^{ごめん}ねえ。恭^こ「あい、あいでなさい。長^{ちやう}「兄^{にい}さんの名^なは何^{なん}とか云^いつた

つけ、ボン太さんぢやアねえ恭太さんか、親方にさう云つておくれ、去年の十月詔らへた二挺の鉄はもう出来上つたかつて。恭鉄は出来やアしないよ。長「出来やアしねえつて、親方が請合つたのだから」恭「請合つたつて出来ねえよ、何うしたつて出来やアしねえ。長「困るナア、出来なければ出来ると云つて請合はなけりやア宜いに、困るナア、親方にさう云つておくれ、お老爺さんは何うした。恭「何うしたつて眼を眠つて固くなつて、冷たくなつたから、桶の中へ入れッちまつたのだ。長「フウーン……ぢやアお老爺さんは死んだのか、これはどうも惜いことをしたのう、名人を一人なくなしちまつた、日本中の髮結が何のくらゐ困るか知れやアしない、さういふ事と知つたら二十挺ばかり詔らへて置いて、後で賣れば何のくらゐ儲つたか知れねえのに、惜いことをした、此人は、斯う云ふ氣だから力を落さねえのだな、おいお老爺さんが死んだら困るだらう。恭「ウ、親方が死んだつて哀しくはねえが、親方のゐる時分にア何か喰ひてえと云へば直に買つてくれたが、親方が死んだやア何も買つて喰へねえから、己も一緒に桶の中へ入れて呉れろつてつたが、生きてゐる中はいけねえつて入れて呉れねえのだ、いけアしねえ。長「可愛さうに、それが人情だ、娘さんはさぞ力を落したらう。恭「なにそんな物はあつことしやアしないよ。長「さぞ泣いたらう

ね。恭「毎日泣いてるよ、だからね、矢切村の叔母さんが出て来て、さう泣くんぢやアない、
今日は精進もんで御飯ア食はせるとよ。長「そんなら今日は七日か。恭「なに今日は二十六日
だ。長「は、面白いことを云ふ人だなア。と云ふうちお富は奥から店へつか／＼と出て参り、
富「親方おいでなさい。長「誠に何うも、私アね些とも知らなかつたのですが、今恭太さん
から聞いて驚いたんですが、あんなに御丈夫でおいでなすつたのにね、とんだ事でござえ
やした、嘸まアお力落してござえやせう。富「有難うございます、お詔らへの鉢はまだ出来
ずに居りまして誠に相済みません。長「どう致しやして、鉢どこぢやアござえやせん、實に
惜いことをいたしやした、寶物をなくしたやうなもので、何のくらの私共は困るか知れや
せん。小「おい長次さん何うしたんだ。長「あ、悔りした、後から突然に突ツついちやアいけ
ねえ。小「おまへくらゐ怠ける髪結はないつて、大旦那が大附腹ア立つてゐるぜ、嘯ばかり
吐いて丁場を明けたり、若旦那を遊びに誘ひ出したりして悪い髪結だつて。長「嘯を吐いて
明けるわけぢやアねえが、此家の親方がおめでたく成つたので悔に來たんだが、明日は屹
度往きますから宜しく、また濱田へお使ひかえ。小「富はけぐんな顔にてお富を見ながら、
小「おや、この娘さんだ、此間私が若旦那のお供して年始廻りに歩いた歸りに、私の腮を